



パラワン島のベトナム人と在来犁

小池正之

農林工学系教授

トウェ君は16才。先程から、猫の額ほどの水田で水牛を御しながら犁(すき)で耕うんしている。一見してユツクリした動きであり、むずかしい仕事ではなさそうだが、若い彼が時々体勢を崩すことから、水牛の操作に何がしかのコツが必要なのだと感じとることができる。畦際では、すぐ上の姉が、彼の動きを目で追っている。

彼の両親がベトナムの紅河デルタ地帯を離れる決心をしたのは、1972年のことだった。戦禍を逃れる難民の群は、当時その受け入れをめぐって、周辺諸国に緊張をもたらしていた。彼らはボロ船にすし詰め状態で南シナ海へと進み、ほぼ無一文の有様でフィリピンのスルー群島ジョロ島に漂着したという。そこで地元警察の監視のもとに、ミンダナオ島へ送られ、仮設収容所で7年間過ごし、1979年に現在のパラワン島難民センターへ移ったのである。ここは一種の租界地の

趣がある。トウェ君は難民二世だ。彼にとって両親が味わった辛苦は、幼いころに耳にした昔語りから類推するしかないが、両親の気持ちは一応分かっているつもりであるという。

パラワン州の州都プエルトプリンセサは、熱帯の花が街路に沿って咲き競い、しばしば山の稜線から海岸線に向けて少し強い風が吹く、心躍る街である。逆に、海岸線から内陸部を見ると、密林の帯が横方向に長く続いており、それが街並の匂いと奇妙に適合して景観上の特色を創り出している。このような自然因子と対極をなす形で、「塙のない刑務所」や海岸線に広がるリゾート施設は、人間の欲望と希望をないまぜにした匂いを演出している。トウェ君はベトナムの風を知らない。生まれたときからこの地で、両親の愛情に包まれて育った。今は、この地で立派に生きていきたいと考えている。

バラウン島の在来犁

トウェ君はいつの頃からか、父親から牛耕のやり方を伝授され、今では一人で任されるほどの腕前になった。辛い仕事を抵抗なく、むしろ自分から進んでやっている理由は何かを考える。かつて目にしたベトナムの教科書に牛耕の図があり、そこで使われている犁が脳裏に焼き付いているからであろうか。その犁は、今手にしている犁と同じ種類であり、これを使っている自分は、限りなく両親の祖国とつながっていると熱い思いが体の内から湧き上がってくる。硬質木製犁の触感は、心にくいまで暖かく、地肌の鏡のような光沢は、誇らしい気分さえさせてくれる。

フィリピンの在来犁は、古く中国から伝播した打延（うつばえ）型で、浅耕向きの長床犁を水牛1頭で曳く方式が主流となっており、現在も多数用いられている。インドネシアから北進してマレー犁が用いられるようになっていてもよさそうなものだが、そうはならなかった。

犁は犁先が命であるが、その材質は木質であったり鉄材であったりする。摩擦が激しいため鍛冶屋へ修理に出すことになるが、この技術屋集団の腕前がその土地での犁の定着率に影響する。腕前が劣れば、定着率は下がり始めるため、犁先

の改良をするか代替品を求めることになる。中国大陸から犁が伝播した当時、技術屋集団もほぼ時を同じくして移ってきたと思われているが、その技術は在来農法にとって魅力的な存在と移ったことであろう。しかし興味深いことに、以後の農耕史において、この犁が改良されたという史実に行き当たらない。例えば日本の場合、大陸伝来の長床犁は江戸時代まで改良が進まない状態であったが、明治時代に入って西洋農法の導入に合せる形で、深耕のできる短床犁の開発が行われ、その技術は反転して朝鮮半島へ伝ってそこでさらに改良されるというブーメラン効果をもたらした。日本もフィリピンもユーラシア大陸の東端に位置する島国であるため、文化や技術受容において類似性があるのではとの仮説は、ここではどうやら成り立たない。

またフィリピンは、1960年代の「緑の革命」を受け入れるまでは、稲の収量は低水準にあった。化学肥料を投入するか有機物を土中に混入して地力を維持することができれば、収量の増加を期待することができる。しかし長床犁で可能な最大耕深は12cm位であり、土を完全に反転することはできず、有機物もすき込むことはむずかしい。かくして、短床犁への技術的移行が発生する与件が揃うこと

になった。しかし、この改良に向けた動きを助長しうるような社会的契機が脆弱であったうえ、わずかに芽生えた契機も職人意識の希薄さにより立ち消えてしまったものと考えられる。

犁の審美性

耕した後の地表面は一寸荒々しい躍動感がある。そのように土を起こして反転、破碎する犁の曲面部の形状は、単純さゆえに洪みのある美しさをもっている。エジプトで出土した古代木製犁は、紀元前3000年まで遡る。端正な象形と信頼できる機能性が相俟って、審美的意識に一脈を通じる思いを抱かせることになるのであろうか。この曲面部形状の仕様は、土質、土の硬さ、作業速度、作用深さ、風土などに影響を受けるため、地域固有の特性を反映したものとなる。それらに鍛冶職人の個性がさらに加わるため、形状決定基準の確定作業は複雑であり、曲面仕様の多様性を説明しうる理論体系はまだない。

畜力犁のこれから

農業の機械化は随分と進んだ。とくに先進国ではその勢いはロボット化の次の技術を採用込む段階に至っている。それでは開発途上国では、ローテクとされる

畜力耕は消滅の途を辿っていくのであろうか。

フィリピンでは、農家の資金力と技術に対する考え方から判断して、レンタル方式の機械化と畜力依存農法が併存していくと考えられる。家族や血族とのつながりを大事にする気質と価値感は、技術の受容構造においても特異な対応として現れる。この対応の特徴は、個人が幸福であることの実感と、その充足度が高ければ、当該技術は無理なくその社会に受け入れられることになる、との精神構造に依っているとと思われる。

トウエ君の農作業は、少し予定の時間を超過したけれども、田面の均平さは見事な出来映えであった。プエルトプリンセサではマニラの流行がすぐショーウィンドウに出てくるが、街路では水牛が依然として荷車でなくソリを曳いている。彼は、このアンバランスがパラワン島のありのままを示した姿だと言う。彼の幸福感にこれからもゆらぎがなければ、このような農耕風景が今後も続いていくのかもしれない。トウエ君の姉は、街でベトナム料理店を開きたいと言って笑った。

(こいけまさゆき 生物生産機械学)